

ジャーナリズム界の変容と象徴暴力 —ピエール・ブルデューのメディア批判を再考する—

佐 幸 信 介*

1. はじめに

『メディア批判』（原題 *sur la télévision*）は、ピエール・ブルデューがジャーナリズムやメディアを直接論じた数少ない論考である。ただし、この論考は他の一連の仕事とスタイルが異なっており、社会批判的なメッセージが強い。原題が示す通り、テレビを対象としたものであるが、この論考そのものがテレビで行った講演を書き起こしたものである。テレビ批判をテレビの講演で行うという、戦略的意図が込められている。こうした戦略を、1990年代後半以降のブルデューの社会批判を他の政治・社会的発言を含めて、同時代的な社会状況の文脈のなかであらためて考えることも可能である。もちろんそれは、何らかの政治的イデオロギーを措定して、そこに還元して説明することではない。『メディア批判』の冒頭で「テレビは、文化的生産の様々な領域（芸術、文学、科学、哲学、法律）を危険に晒している」と述べているように、テレビが有している効力を批判しつつ、反対に様々な文化的生産の自律的な界を擁護へと向かう。それは、ブルデューにとって論じると同時に行動しようとするものであった。つまり、テレビ的な論理や力が文化生産の界に介入することへの危機感に裏打ちされた、ある強度をもった言説的な戦略そのものであった。

しかし、こうした文化生産の界の危機に対する問題意識は、テレビを論じるところから始まったわけではなく、メディアと並んで同様の事態が生じるとブルデューが考えていたのは、「科学の界」であった。金森修がブルデューの界概念を論じる中で指摘しているように、1990年代前半から科学論には有力な動向が生じ、「純粋な理論関心に基づく基礎科学を枢軸として考える従来型の科学像を積極的に解体し、むしろ同時代の社会的、産業的要望に対応するように科学を変えるべきだとする考え方が台頭してきた。ブルデューは、こうした科学の変容に対して「純粋科学」と「何かに従属した科学」という二分法を止揚して、界の概念からの分析を進めようとする。「社会に役立つスタンス」をとるのは、社会からの要望に応えるというよりは「科学内部での正当性の鎧を身に纏いやすくするため」であり、「応用科学への接近、それは科学者の、科学者集団を標的とした卓越化 (*distinction*) の手法」である（金森 2015:57-58）。科学への産業的要請や応用科学を重視する社会への移行は、科学の界の構造変容を促す契機であるが、重要なのは外部からの産業的な要請が科学の界を瓦解させるのではなく、外部からの要請が科学の界の内部に入り込み新たな利害・関心へと形を変えて機能し始めるという点である。

ジャーナリズム界もまた、科学の界と同様の環境に置かれていると考えることができる。産業的な論理や商業主義的な論理が界に陥入しはじめたとき、報道それ自体の卓越化に商業主義がまきとわ

*さこう しんすけ 日本大学法学部新聞学科 教授

りつきはじめる。こうしたジャーナリズム界が直面する構造変容に対して、先にも述べたようにブルデュー自身が、ジャーナリズムの界の自律性の擁護、あるいは文化生産の自律的な界の擁護に向かって行動しようとする。それは、一見すると現代においては時代錯誤的な古典的な界への回帰とも受け取られかねない。だが、ブルデュー自身はおそらくそのように受け止められることは百も承知で、むしろそう受け止められることを誘引しているようなところがある。『メディア批判』は、ジャーナリズム界を議論の基軸にしているが、『ディスタンクシオン』や『芸術の規則』の精緻さや執拗さに比べると、界の分析は粗い。しかし、分析の粗さを代償にしてまで、テレビあるいはテレビ的なものの介入について告発する必要があったと考えるべきであろう。

『メディア批判』においては、新聞とテレビとを対比してジャーナリズム界を論じ、新聞を範型にして形成されてきたジャーナリズム界を擁護しようとしている。図式的な二分法を用いることでわかりやすい語りがなされているが、だからといって新聞がジャーナリズム活動として優れていると述べているわけではない。新聞もまたテレビ的なものになっていく事態の方が問われている。その意味での図式的な立論が導入されている。そして、このジャーナリズム界の構造変容は、先のブルデューからの引用にもあるように、他の芸術や文学や科学、哲学などの文化生産の界の構造変容を同時に生じさせる。つまり、テレビ批判はジャーナリズム界に限定されない。ジャーナリズム界の構造変容が、同時並行的に他の文化生産の界にまで変容をもたらす。そうした力がジャーナリズム界に働いていることが問題なのである。

2. ジャーナリズム界の構造——文化エコノミーの領域

新聞の最も熱心な読者とは、ジャーナリストたちである。もちろん新聞に限らず、テレビ・ニュースについても同様のことが言えるだろう。複数の新聞をまんべんなく、比較しながら読むという読書行為は、いわば職業的な読み方であり、普段の生活から考えるならば特殊なケースである。しかし、この特殊な読書や視聴の形態——ニュースや情報の生産者とオーディエンスとが一致するような状況が、ジャーナリズム界の特徴のひとつである。

ジャーナリストたちは注意深く読むことで、次に何をニュースや報道の主題にするのか、すべきなのかを知ることができる。自らのジャーナリズム実践は、他の新聞やテレビが教えてくれる。教えてくれるというのは比喩的な言い方だが、それは他紙や多メディアと同様の記事を報道しなければならないこともあれば、他との差異化や卓越化を図ろうとすることもある。だが、この同調も卓越化も表裏の関係でしかなく、それゆえに相互規定的であり相互依存的である。たとえ、他のメディアに対して批判的な関係や敵対的な関係を取り結んだとしても、この関係こそがジャーナリズム界の構造を形成する要因となる。ジャーナリズム界は、このような相互規定、相互依存的な関係の歴史性によって構造化されている。報道をするというジャーナリズム実践は、ジャーナリズム界の構造とともに行われるのである。だからこそ、ニュースや報道は似通ったものになる傾向がある。P・シャンパーニュも指摘しているように、メディアは「望む望まないに拘わらず、同じ三面記事的なものにも飛びつかねばならず、同じ小さな政治的発言にもコメントしなければならず、同じ記者会見で押し合いへし合いしなければならない。要するに、是非の別なくこの界の論理のみちびくところへ赴かなければならないのだ。」(Champagne 1990=2004:257)⁽¹⁾

ブルデューの議論を敷衍するならば、ジャーナリストたちはジャーナリズム界に参入し、ジャーナリズム実践を通して、ジャーナリズム界特有の文化資本とハビトゥスを身に着けることになる。それゆえ、ジャーナリストは、ジャーナリズム界が求める論理に応え、的確にジャーナリズム実践を振る舞うことができる。⁽²⁾

では、このジャーナリズム界において、ジャーナリストやメディアは何を獲得しようとして、他のメディアに対して卓越化や同調を行うのだろうか。それは、売り上げのような経済的な価値以上の何ものかである。ブルデューは、それを象徴資本と呼び、その獲得のための競争を象徴闘争と呼ぶ。象徴資本とは、それぞれの界に特有な資本として共有され、獲得している資本の量によって界の中での自らの位置を得ることができる。この資本は、ニュースを生産する際に活用、投入されるものである。例えば、ニュースとしての価値は、速報性とか正確性、客観性、取材力や調査力などとして語られる。これらのニュースを生産するのは、ジャーナリストたちであり、ジャーナリストが属しているメディアである。このニュースは、単純に経済的な価格には換算されない。あるいは、経済的な価格に換算されないからこそ、ニュースはニュースとしての象徴的な価値をもつことができる。それは、経済的な価値を否認することで、より象徴性を高めることができるからだ。つまり、脱利益追求的な利害 (interest) こそが、ニュースそのものの価値を担保している。

界のなかで象徴資本の獲得を目指して行われる競争は、文化的なエコノミーとして作用する。ブルデューが、『ディスタクシオン』や『芸術の規則』、『ホモアカデミズム』などを通して一貫して議論してきたのが、この文化的なエコノミーの領域であった。抽象的な概念である文化資本や象徴資本は、それぞれの界において固有な価値や資本の具体的な姿となって機能する。ジャーナリズム界においては、よりよいニュースをより多く生産することができる者たち、すなわち象徴資本を多く有しているジャーナリストやメディアこそが、社会的に信頼を獲得することができる。何がよりよいニュースなのか、すなわちニュースの正当性は、この界の参加者によって相互に承認されるものである。あるいは、何をもって正当とするのかをめぐる競争や論争自体が象徴闘争を意味している。

たしかに、メディアへの信頼性という評価は、オーディエンスとの関係において成立している。しかし、この信頼性もまたジャーナリズム界でのジャーナリストやメディアの象徴資本やある種の権威を高める方向へと循環していく。ジャーナリズム界の内部で、他のジャーナリストやメディアから承認され認められること、さらに他のジャーナリストやメディアよりも自らがより優位な位置に立つことが争われているのである。

媒介性の独占と権力

では、ジャーナリズム界はどのようにして一つの界として機能することができるのだろうか。ジャーナリストは、事実報道や客観報道など生じた出来事に忠実な言説のスタイルであれ、綿密におこなわれた調査報道であれ、社会的世界を描くことを専門にするがゆえに、オーディエンスや社会の他の人びとに対して、あるいは他の文化生産の界の生産物や生産者に対して特別の位置に立っている。

このジャーナリズム界で行われる文化的生産の特徴は、取材をし、ニュースを作り出すというという言説的な実践という点にとどまらず、「情報を大量に生産し、流布させるための手段を事実上

独占」していること、つまり「公共空間」へアクセスする回路、媒介性を独占しているという特徴がある (Bourdieu 2000:81)。この「公共空間にたいする媒介性の独占」という点が、ジャーナリズム界を成立させる重要な条件である。このことに対して、メディアはオーディエンスからの評価に何らかの形で曝されていると考えることもできる。しかし、先に述べたようなオーディエンスとの関係において成立しているとみなされる信頼性を考えた場合でも、実際には、オーディエンスに対して投げかけられた問いでしかない。つまり、オーディエンスは、メディアに対して非対称的な立場に立たされたおり、オーディエンスがメディアに対して抱く信頼という表象は、メディアの方から提供されているのである。誤解を恐れずに言うならば、「信頼するか否か」という問いまた、メディアあるいはジャーナリズムの側から押しつけられているのである。⁽⁴⁾

このようなメディアとオーディエンスとの関係は、メディアの言説的实践の場合もあてはまるだろう。メディアの言説的实践は、ジャーナリズム界のなかで養成された性向にもとづくジャーナリストの知覚や選別の枠組みの提示として行われるがゆえに、ということは、ジャーナリズム界に属さない者にとっては、ジャーナリズム界に特有なハビトゥスや文化資本を身につけていないがゆえに、オーディエンスとメディアはコミュニケーションの非対称性において実践されているということになる。メディアは、すくなくともマス・メディアは、このコミュニケーションの非対称性を媒介しており、あるいは、非対称的なコミュニケーションという関係を媒介していることができる。

こうした公共空間へのアクセスの独占という力関係は、オーディエンスとの関係だけでなく、他の界との関係においても成立しているとブルデューは指摘する。ジャーナリストたちは「公的に自らを表現すること、公的に存在すること、知られること（これは、政治家とある種の知識人たちには最も重大な賭け金です）を可能にする手段に対する権力を持っている」(Bourdieu 2000:82)。人びとや事件、出来事を社会に知らしめる権力。メディアは、このような媒介性の権力を有していることになる。別の言い方をすれば、ジャーナリズム界が成り立つのは、(少なくとも、マス・メディアが公共空間と密接に結びついている次元においては)このような権力を有するメディアをジャーナリズム界が事実上独占しているからである。しかも、この媒介性の権力は、規範的な意味において中立的で、客観的で、時には批判的な報道をとおして行使されなければならない。そうでなければ他の界（政治界、アカデミズム界、経済界 etc.）に対して、正当に関わることができない。媒介性の権力の行使は正当なものであるのだ。

ジャーナリズム界の自律性の弱さ

ジャーナリズム界は、このように他の界に対して影響力を持っているが、反対に他の界と比べて相対的自律性の度合いは低いという、もうひとつの特徴を有している。それは少なくとも2つの理由がある。第一に、芸術や科学のような審美性や真理を探究するような創造性の原理を自らの内に持っていないという点である。それは、ジャーナリストが報道するニュースの素材や情報源、事件や出来事はほとんどの場合ジャーナリズム界の外部から提供されるという事実を負っている。ブルデューはこの特徴について、文化生産全体の構造において他の芸術や科学やアカデミズムに対して下位／劣位に位置づくという。つまり、劣位に位置しながら、他の界に対して力を発揮するという捻じれた関係を構成する。

第二に、市場——オーディエンスとの間で構成する市場（販売や視聴率）と広告の市場にジャーナリズム界は依存している。他の芸術などの界と比べた場合にも、この依存度が高く、その意味でも文化生産の構造において下位に位置づいていることになる。

このように、媒介性の独占や媒介性の権力を有しつつも、他の界やオーディエンスが経済的に換算された視聴率のような市場に依存あるいは従属することで、ジャーナリズム界の独特な自律性が確保できるのである。界の自律性は、経済的な市場と文化的な市場——商品としての市場と象徴財としての市場とがどのように関係するかで、その度合いが決まってくる。それは、構成上の割合とか配分といったことではなく、先にも述べたように界に属している行為主体（芸術家、学者、ジャーナリスト etc.）が、経済的市場をどれくらい否認するのか、脱利益的な利害をどれくらい志向するのかという実践性と相互行為が界の特徴を決定するのである。ジャーナリズム界の場合、芸術や科学と比べると、この経済的なものと文化的なもの、つまり商品と象徴財との換算率が高く、両者の直接的な関係のなかでジャーナリズム界が構造化されているのである。⁽⁵⁾ブルデューは次のように指摘する。「テレビ局や新聞の間での経済的な競争、読者や視聴者、あるいはいわゆる市場でのシェアを求める経済的な競争が、ジャーナリストの間の競争、すなわち固有の特殊な争点（スクープ、独占報道、職業の中での名声等）を持った競争という形態をまとうのです。そして、この競争は、経済的力関係あるいは象徴レベルの力関係の中での当該の報道機関の位置と結びついた拘束に従っていますが、金銭的な利益を得るための純粋に経済的な闘いという外見は持たないし、そう考えられることもない」（Bourdieu 2000:71）。

3. メディアと象徴暴力

1990年代の半ばに出版された『メディア批判』は、1980年代のフランスのテレビ局TF1の民営化とその後のメディアの商業主義化を念頭に置かれている。『メディア批判』を読むと、ブルデューの主張の強さとは対照的に、その議論の内容は既視感の方が強い。ブルデューの議論をわざわざ介さなくとも、私たちは1980年代以降のテレビ研究やテレビを通じたメディア研究、あるいはテレビ批評の蓄積を知っているからだ。

しかし、メディアと商業主義の問題やマス・コミュニケーションの成立以来内包していたメディアの所有と報道や編集権の問題など、こうした一連の歴史をブルデュー自身が知らないわけではない。にもかかわらず、本稿の冒頭で述べたように、新聞を範型とするジャーナリズムとテレビを範型としたジャーナリズムとの二項対立を設定するのは、次のようなテレビの象徴暴力の問題を提示することが意図されていると思われる。

「ジャーナリストという職^{メチエ}に内在する傾向——つまり彼らなりの世界の見方、彼ら自身が職業的養成過程で身につけた素養、彼らの性向に内在する傾向、そしてさらにジャーナリズムという職業倫理に従って、ジャーナリストは（…）特定の現実の中から、ある側面を選び出します。しかしそれは、ジャーナリストたちに固有の知覚カテゴリーに対応した、現実のまったく特殊な面なのです。（…）選別の原理は、センセーショナルなもの、人目を引くものを探すことです。テレビは二重の意味でドラマ化に訴えます。テレビは、一つの出来事を演出し、「絵」にします。同時に、ことの重大さ、深刻さ、悲劇的で悲惨な特徴を誇張します」（Bourdieu 2000:28-29）。

メディアによって構成される表象は、人びとにたいして「ひとつの現実」を提供するが、それは一種の表象の押しつけとして作用している。この押しつけをブルデューは象徴暴力と呼ぶ。メディアは選別の行為、あるいは編集行為を行うが、この選別それ自体が恣意的なものである。この恣意性は、ジャーナリストの職として、事実性とか客観性といった公準にもとづき、つまり、恣意的であると同時に妥当な選別（編集）によって、あるいは選別の原理としては妥当であるがゆえに、この選別の過程が隠されたままで人びとに提示され、表象は象徴暴力という性格を帯びることになる。この象徴暴力の作用は、基本的には新聞であろうとテレビであろうと変わらない。だがブルデューがテレビの象徴暴力を問題にするのは、テレビの方がより感覚的であり、その視覚性や聴覚性ゆえに象徴的效果を発揮しやすいからである。それはブルデューがアルジュリアの人類学的研究以来フランスの階級社会の分析に至るまで一貫して問題にしてきた象徴支配の問題領域でもある。

象徴暴力と力の隠蔽

ブルデューはデュルケームの分類の問題を継承した社会学者の一人であるが、『再生産』や『ディスタンクシオン』、『実践感覚』などの主要な著作において、人びとの分類や知覚と社会的階級＝社会的分類との関連が分かちがたく結びつく権力を主題化してきた。この分類と階級との関係に作用する権力を象徴権力と呼び、そこで成立する支配の形式を象徴支配として問題にしてきた。

さらに、象徴権力の具体的な力の行使の形式を象徴暴力と呼ぶ。この象徴暴力について、ブルデューはデュルケームの議論を引き継ぐ形で次のように述べる。「分類の諸形式とは支配の諸形式であり、認識〔connaissance〕の社会学は、承認〔reconnaissance〕と無知（無理解／無自覚）〔méconnaissance〕との関係を切り離すこと」はできない（Bourdieu 1987=1988:43）。象徴権力は、「認識－承認－無知（無理解／無自覚）」が一連となつて行われる人びとの象徴的实践において作用する。

ブルデューは、また次のようにも説明する。「^{メコネサンス}無知」とは「暴力であるであることが見落とされる度合いに応じてまさに行使されるような暴力を承認してしまう事実を指し」、「社会的行為者と社会的世界とを結びつけている根本的で前反省的な前提の全体を受け入れてしまうという事実」である（Bourdieu 1992=2007:216-217）。象徴暴力の作用に、通常人びとは気がつかない。象徴暴力は、分類することや何かを識別すること、社会を認識することなど、いわば知覚カテゴリーに作用する権力であり、この知覚の仕方の自明性が自明な日常実践として形成する権力である。

日常的な実践のなかで、社会的分類を受容するという言い方は実は抽象的である。私たちは、自らが知覚や分類図式を用いていることを自覚しながら日常実践を行っているわけではない。ブルデューが例示してる事例の方がより具体的に確認できるだろう。例えば私たちは人間や物を分類したり形容したりする際に、さまざまな対義的な言葉の組み合わせを用いる。高い（至高の、高尚な、純粹の）／低い（低俗な、平板な、質素な）、精神的／物質的、繊細な（洗練された、優雅な）／粗野な（野蛮な、卑俗な、野蛮な、乱暴な、粗雑な）、独自の（異なった、卓越した、特異な）／ありふれた（普通の、陳腐な、月並みな）といった「種々の形容詞が織りなす対立のネットワークは、社会秩序全体を背景とし」、「つまるところ支配者の「エリート」と被支配者の「大衆」との対立を基本としている」（Bourdieu 1979=1990:340-341）。

こうした形容詞を用いた分類は、熟考された言説的实践というよりも感覚的なものである。ブル

デュエ的な言い方をすれば、le sens pratique の sens = 感覚／意味の次元で行われる。この le sens pratique に象徴権力が作用する。そして、さらに重要なのは、高い（至高の、高尚な、純粹の）／低い（低俗な、平板な、質素な）、繊細な（洗練された、優雅な）／粗野な（野蛮な、卑俗な、乱暴な、粗雑な）等々の対立は、高い（至高の、高尚な、純粹の）、繊細な（洗練された、優雅な）側から下された対立関係であるという点である。低俗な側、粗雑な側、月並みな側は、高尚な芸術や文学、あるいは洗練された料理などを前にしたとき、往々にして引け目や不釣り合いさを感じたり、時にはあきらめのようなものさえ感じるかもしれない。つまり、こうした分類や知覚の図式は、優位な側から劣位の側へ、支配する側から支配される側へ押しつけられているのである。こうした押しつけ＝象徴暴力が、私たちの日々の実践に編み込まれている。⁽⁶⁾

ブルデューの象徴暴力論は、そもそも学校教育を対象とした『再生産』のなかで、教師と生徒とのコミュニケーション関係を範型にしたものである。ここでは、次のように説明されている。「象徴暴力 (violence symbolique) を行使する権力 (pouvoir)、すなわちさまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力 (force) の根底にある力関係 (rapport de force) を隠蔽することによって、それらの意味を正当である (légitimes) として押しつけるに至る権力は、そうした力関係の上に、それ固有の力、すなわち固有に象徴的な力を付け加える」(Bourdieu et J-C. Passeron 1970=1991:16)。

象徴権力は、教師と生徒との多様なコミュニケーションや相互行為を通して発揮される。ある種のイデオロギー論の枠組みとの同型性を見出すことができるが、重要なのはどのようなイデオロギーであろうとも、象徴権力からは逃れられないということの方である。つまり、脱イデオロギー的な教育行為をしようとしたとしても、学校教育の正当性が認められる限り何らかの押しつけは発生するのである。⁽⁷⁾

このような学校教育のコミュニケーションを範型とした象徴暴力の形式は、報道の場面においても応用的に説明することが可能である。先にも述べたように、ジャーナリストは、報道の場面で、社会に対する見方や知覚の仕方を人びと、つまりオーディエンスに伝える。このとき同時に象徴暴力を行使している。この押しつけが暴力として顕在化しないのは、先に述べたように伝えるという実践 (pratique) が正当なものとして、そこで提示される社会の表象の正当性ととも承認されているからである。この正当性は、ジャーナリストにとっても、オーディエンスにとっても正当なものとしてされているがゆえに、報道の信用やメディアの信頼を同時に押しつけることができる。

しかしながら、オーディエンスは一様に、ジャーナリストが提示した「認識・知覚」の仕方を、そのまま受容し、影響を受けるわけではない。認識や知覚の偏差や多様性は、階層と関連する。例えば『ディスタクシオン』のなかで、新聞の購読と社会階級との関連を議論しているが、その要点は、高級紙と大衆紙、あるいは中立性が高い新聞といった、ジャーナリズム界の関係構造と、社会階級の High - Midle - Low の関係構造とは相同的な関係にあり、支配階級のクラスターは、高級紙に対して自らの政治的立場や考え方を形成するように読み、下層のクラスターは大衆紙や中立性が高い新聞に対して脱政治的に新聞を読む傾向があるというものである (Bourdieu 1979=1990:299-314)。「ジャーナリズム界の構造」と、新聞を読むという「読書の社会的空間の構造」との関連から析出されるのは、新聞もまた社会階層化を作用させる象徴財のひとつということである。

4. テレビ的な象徴暴力と民主主義の問題

ブルデューがテレビの象徴暴力を問題にするのは、「新聞」を範型にして形成してきたジャーナリズム界にテレビが参入することによって、商業主義的な論理、広告やマーケティングの論理を持ち込まれるからである。そして、「センセーショナルリズム」や「エモーショナルなもの」あるいは「ポピュラー・センチメントなもの」が優位になっていくことへの批判である。

しかし、メディアが持ち込むあからさまな経済の論理はテレビが最初ではない。そのことはブルデュー自身がよく知っている。『芸術の規則』のなかで、19世紀前半の芸術がブルジョワ的な社会に侵されていく変化について次のように指摘している。「ブルジョワ世界」は、その価値観や、正統化の手段を統御しようとする意図を、芸術の分野においても文学の分野においてもかつてこれほど露骨に表明したことはなく、新聞雑誌やそこに寄稿する三流作家を通して、文化生産についての低俗でおとしめるような定義を人々に押しつけようとしていた。新聞雑誌がこぞって喧伝しもちあげるような作品まで含めて、最も凡庸な文学作品にたいして帝室がお墨付きを与え、経済の支配者たちが通俗的な物質主義をあらわにし、作家や芸術家の大部分が帝室への隷属状態」におちいることになった(Bourdieu 1992=1995:99-100)。

19世紀に文化生産の界を侵食していたのは、新聞と雑誌であった⁽⁸⁾。ブルデューは、19世紀に生じたことが、現在かたちを変えて生じていると考えているのだろうか。「堅い新聞」が一方の極となるジャーナリズム界を擁護しようとする事と、19世紀に起きていたこととの間には議論の断絶ないし、飛躍がないとは言えない。残念ながら20世紀以降の芸術界とジャーナリズム界との関連について、ブルデューは経験的な研究を残していない。その意味では、ブルデューに即するならば、先に引用した1970年代の『ディスタクシオン』以降に生じたテレビの台頭という20年ほどの短い時間軸のなかで、『メディア批判』は読まれるべきであろう。

その際に、テレビ的なもののジャーナリズム界への参入について考えるべき重要な論点は、政治あるいは政治界との関連である。というのもジャーナリズム界と政治界はともに自律性が弱いという点で共通しているからだ。「ジャーナリズム界に関わる行為者と政治界に関わる行為者は、絶え間ない競争と闘争の中にあり、またある意味ではジャーナリズム界は政治界に包含されることによって政治界の中で極めて強力な影響を及ぼしている。しかしながら、この二つの界は、極めて直接的に市場と直接投票の評価＝裁定の支配下に置かれているという共通点がある。したがって、ジャーナリズム界の支配力は、政治界に関わる行為者が、最大多数者の、時に熱情的で非反省的でもある期待と圧力に従属する傾向を強化する」(Bourdieu 2000:136)。

このようなジャーナリズム界と政治界との相即的な関係について、ブルデューが述べようとしていることは次のようなことである。視聴率を取ることがジャーナリズム界のひとつの価値として折り返される。つまり、よりよいニュースとは何かという正当性をめぐる象徴闘争から、より多く視聴されたニュースが有力な争点となると、ニュースは、わかりやすさとか総花的な最大公約数的なものへと希釈する。オーディエンスが見たいと想定するものを先取りする。「わかりやすさ」を象徴暴力として押しつけることを自ら問いなおさないメディアが、政治をコンテンツとして取り込んでいくとき、「政治」を報道するのではなく、「政治ゲーム」をニュース化する。政治家たちもまた、この政治ゲームに勝つためにメディアと手を結ぶ。政治は所詮政治ゲームなのだということが

映し出され、パブリックな視点との断絶が生じ、脱政治化もしくは政治への幻滅を生み出しかねない (Bourdieu 2000:150-158)。

ブルデューが批判するのは、こうしたメディアと政治のゲーム化のシニシズムである。⁽⁹⁾ おそらくブルデューがテレビ批判で念頭に置いていたのは、このような民主主義の問題である。あるいは representation の危機の問題である。政治は誰を表象 = 代表するのか、メディアは何を表象するのかという representation の原義に立ちかえったとき、メディアと政治が共犯するか、メディアの表象に政治の表象が取り込まれていくとしたら、それは両者の界の自律性の危機なのである。そしてテレビ的なものが、ジャーナリズムの規範を冷笑することを拡散させてしまうのだとしたら、ブルデューはその象徴暴力こそを暴こうとしたと言えるだろう。1990年代の半ばに『メディア批判』が書かれてから、すでに20年以上が経っている。ジャーナリズム界は現在、もっと厄介な局面に置かれている。

- (1) パトリック・シャンパーニュは、ピエール・ブルデューと社会科学高等研院において共同で調査、研究を行ってきた。『世界の悲惨』 (*La misere du monde*, 1993) は、ブルデューとの共著である。ブルデューの社会学を引き継ぐ、社会学、政治学、世論研究者である。シャンパーニュが述べている界概念は、ブルデューから援用したものである。
- (2) ブルデューは、「文化資本」には三つの形態があるという。第一に学歴や資格などの制度化された形態。第二に、保持している書物や絵画などの物質的な形態。第三に、ハビトゥスと関連する身体的な形態である。
- (3) 佐幸 (2011) も参照のこと。
- (4) このことは、きわめて単純に「メディアはオーディエンスを信頼するか？」という問いがないという事実裏打ちされている。
- (5) ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』のなかで新聞を「一日だけのベストセラー」と呼んだ。このことは、ネイションという共同性が近代において誕生したことを示している。同時に、紙媒体の商品としての耐久性が短時間化されることも意味している。商品としての価値も、ニュースという象徴財としての価値も一日しかもたないからだ。新聞は、翌日には古新聞となり、ガジェット化する。新聞は、商品と象徴財が紙というメディアの物質性に統合されているが、この統合された関係は、一日で消滅するのである。テレビの場合は、レイモンド・ウィリアムズが述べるように、フローのメディアである。あるいは時間のメディアであり、テレビ広告に典型的なように「時間を売る／買う」という市場が構成されている。
- (6) 例えば、あるファッションに対して野暮ったい服装をしていると見なすことができるのは、洗練したファッションを識別することができ、また本人もそうした服装に馴染んでいるからである。それは、絵画の好みでも、文学の好みでも、あるいは購読している新聞でも、視聴するテレビ番組でも同様のことが言えるだろう。
- (7) こうしたブルデューの議論を敷衍すると、例えば次のような (単純化することを承知の上で) 場面を想起することができる。例えば「 $1 + 1 = 2$ 」ということを教える際に、この計算が真理であるからこそ、教師から生徒へ行使される権力は、象徴暴力となりうるのである。そして、こうした教育的コミュニケーションの何年にもわたる積み重ねによって、進学するにつれて社会階層が再生産されることになる。学校

教育は、教育すると同時に選別の機関でもある。

- (8) 19世紀に被った芸術にたいして、当時ボードレールやフロベールなどの文学者、芸術家たちは、より芸術性や文学性を純化させ、「芸術のための芸術」を集団で志向する。ブルディーが、1990年代後半に、反市場主義と文化生産の自律性を掲げて、知識人たちの連携を図ったのは、フロベールの振る舞うのか、あるいはボードレールの振る舞うのか、といったシニカルな状況に陥ることを念頭においていたと思われる。
- (9) フェイクニュースを考えた時、米国大統領のトランプが「フェイクニュースだ」とレッテルを張る際に用いるのはテレビおよびSNSである。もし仮に新聞を用いるのであれば、すでにその時点で反論となり論争そのものとなる。

引用文献

- Bourdieu,P (1979=1990) *La Distinction*, Ed.de Minuit = (石井洋二郎訳『ディスタクシオン II』藤原書店)
- (1987=1992) *Choese Dites*, Ed.de Minuit = (石崎晴己訳『構造と実践—ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店)
- (1992=1995) *les Règles de l'Art*,Ed.du Seuil = (石井洋二郎訳『芸術の規則 I』藤原書店)
- (2000)『メディア批判』、櫻本陽一訳、藤原書店
- Bourdieu,P avec Wacquant,L. (1992=2007) *Réponses* = (水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店)
- Bourdieu,P&Passeron,J-C. (1970=1991) *La Reproduction*, Ed.de Minuit = (宮島喬訳『再生産』藤原書店)
- Chanpagne,P (1990=2004) *Faire l'Opinion*, Ed.de Minuit = (宮島喬訳『世論をつくる』藤原書店)
- 佐幸信介 (2011)「ジャーナリズムにとって相対的自律性は可能か」『ジャーナリズム&メディア』第4号、日本大学法学部新聞学研究所